

能登地震・豪雨災害があぶり出した貧困

9月21日、能登半島地震の復旧も進まない奥能登を豪雨災害が襲いました。

9月28日、輪島市・珠洲市在住で「あすのぼ能登子ども応援給付金」を受けたシングルマザーの方への電話インタビューを実施しました。震災前から厳しかった生活が震災・豪雨災害でさらに追い詰められている現状をうかがいました。

10月1日(火)夜、オンライン報告会「能登地震9か月・豪雨災害 困窮する子どもたちの現状」を開催し、60人の方々が参加。インタビューの報告とともに、給付金受給者アンケートから、子ども・保護者の「生の声」も紹介しました(2・3面に詳細)。

また、震災直後から被災地で支援を続ける公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの田代光恵さん(国内事業部プログラムマネージャー・写真下)が登壇し、豪雨災害後の状況と「被災地の小中高生世代2,053人アンケート」の結果も発表いただきました。

以前からの困難な課題に光をあてることが重要



そして、「今後求められる被災地の子どもたちへの支援」をテーマに田代さんと小河光治・あすのぼ代表理事が対談しました。

田代さんは、「東日本大震災などで、元々赤字で生活していた方の生活再建が難しい事例を見てきた。災害前からあった経済的困難などの課題に光を当てていくとともに、子どもの声をしっかり聴いて、それを復興に生かしていくことが重要だ。『忘れないで』という声からも、能登にずっと関心を寄せ続けることがとても大事だと思う」と述べました。

小河代表は、「神戸も東日本でも、元々あった課題が震災によってあぶり出された。以前から困難を抱えていた方々が復旧復興から取り残された。能登で同じことがあってはならない。生きる希望をなくさないようなサポートやエールが求められている。給付金を送るだけでなく、今後もいろいろな方々と連携して支援を続けたい」と話しました。

参加者からは、「『忘れないで、見捨てないで』という言葉に胸が詰まりました」、「『能登』という地域の特性を襲った地震と豪雨災害で被災した子どもたちや家族の本音を知ることができ、聴いた私たちが支援者・広報となり、この現実や想いを伝え広めていくことが大切。できることを継続して取り組んでいきたい」など多くの感想が寄せられました。

なお、今回の報告会の動画・第2回報告会の申込は、あすのぼウェブサイトまで。

10月22日(火)19時から 第2回オンライン報告会開催!

**「能登子ども応援給付金」2900万円が不足
ご寄付・応援メッセージ受付中(4面に詳細・QRコード→)**

公益財団法人 USNOVA
あすのぼ
子どもの貧困対策センター

**能登地震9か月 豪雨災害
困窮する子どもたちの現状
オンライン報告会**

2024年10月1日

子どもの貧困対策センター
公益財団法人 あすのぼ



©Save the Children

輪島市、珠洲市在住で「能登こども応援給付金」を受けたシングルマザーの方々に9月28日、電話でお話をうかがいました。

地震より酷い 地獄絵図 言葉にならない 希望がない

【Aさん】輪島市在住・中学生のお子さんと2人暮らしのシングルマザー

豪雨のときは、うちは大丈夫だったが、周りは酷すぎて…。豪雨災害は、地震のときより酷い。地獄絵図みたいな…。言葉にならない。希望がない。

地震で半壊になったが、そこに住んでいたら水害にあったと思う。いまの住まいは、豪雨のときに停電・断水になったが、運良くすぐに復旧した。被災した所に行って「ああ、こんな酷い状況か」と知った。子どもと同じ中学生が、まだ行方不明で見つかっていなくて…。

地震直後から5日ほどは、輪島の避難所において、その後、県外にいる姉のところにも身を寄せた。1月中旬から2月中旬まで、金沢の1・5次避難所に行ったが、食事は、おにぎりが置いてあるだけだった。その後、金沢のホテルに避難したが、駐車場代も高く、食事を買わないといけなかったのも、すごくお金がかかった。2月下旬には、子どもが集団避難していたので、子どもの近くに避難先を変えた。

3月上旬に輪島に戻ってきた当時は、断水中だった。どこかでお風呂をもらってもらったり、簡易シャワーだけという生活が4月初旬まで続いた。

4月までは、震災前からの仕事に戻っていたが、お客さんが減り続け、勤務していた職場が閉鎖になった。別の職場をすすめられたが、道が悪い中、車で片道1時間半もかかるので退職するしかなかった。

その後、失業手当をもらいながら、ハローワークに通い、10月1日から新しい職場に勤める予定だが、その職場が豪雨で浸水した。そこで、遠く離れた本社でしばらく研修になった。私は、泊まり込みの研修となるので、子どもは、近くの仮設住宅に住む私の母に預けることにしている。実家は、地震で全壊となり、母の仮設住宅も水害は大丈夫だったが、近くには行方不明の方もいる。

今回の水害で、このまま能登に住み続けることが難しいとも感じている。子どもの学年では3分の1ぐらいが転校している。水害でさらに引っ越す人も増えると思う。

子どもは、我慢強いのか、怖いことがあっても口に出さない。子どもは、今の友だちと離れたくないと言っている。

行政に何をやってほしいとかも、わからなくなってしまった。10月から新しい職場になるが、子どもを置いて仕事に行くのも本当に不安だ。

地震から何も変わらず 復旧が進まないまま冬が来る

【Bさん】珠洲市在住・小学生のお子さんと2人暮らしのシングルマザー

豪雨のとき、うちの仮設住宅は、浸水しなかったが、すぐ近くの仮設住宅は、床上浸水だった。地震以降、断水やトイレがダメという方もいる。地震から何も変わっていない上に、さらに酷くなった。

地震で自宅は全壊した。お正月で近くの実家にいたが、すぐに外に飛び出たら、隣の家が崩れて、私の母・兄と子どもが下敷きになった。私一人で子どもを救出した。いまの

ところ子どもは、PTSDのようなことは感じないが、怖いのは怖いようだ。

母と兄が子どもにかぶさってくれていた。その後、兄も救出できたが、一番奥にいた母が瓦礫に封じ込まれていて、なかなか助け出せなかった。母は、骨折して4月ごろにようやく歩けるほどに回復した。しかし母は、メンタル的になんかやる気になれないようだ。夏場の明るいときは、気持ちも少し明

るくなるが、これから秋になると気持ちも沈むのではないかと心配だ。

地震直後から4月まで学校の避難所での生活で、その後仮設住宅に入れた。母は、公民館の避難所暮らしだったが、豪雨で学校の避難所が変わった。

地震のときも豪雨も、私たちよりもっと酷いところがあるし、目の前で亡くなられた方もいるので、自分たちが文句を言っていられないと思う。

高齢者が多く、水害後の感染系の病気も心配だ。とにかく国が動いてくれないと何も変わらない。とくに被災地で働いている

方々の心が折れなければと願っている。

私の仕事は、震災前に比べるとほとんどないが、震災関連の仕事を少し手伝っているという状況だ。さまざまなものの値段も上がっていて経済的にも大変だ。

復旧が進まないまま、冬が来そう。冬になると解体などいろいろなものが止まるらしい。最近、すぐ暗くなるので撤収も早くなっている。豪雨でまだ道に流木が残っているなどで通行止になっていたりと、乾くと砂ぼこりも酷い。唯一通れる道が通れなくなり、遠回りとなって…。今後も不安なことが多い。

家も失い生活一変／友だちも転校／感謝の気持ちでいっぱい

給付金を受けた子どもや保護者の方々のアンケートから「生の声」を紹介します。

地震被害のうえ、今回さらに豪雨被害もありました。自分の生活が一変したり、家なども失いました。

これからどうなるかわかりませんが、ふるさとなくなるのはあまりにも辛いことです。これからも復興に力を貸してもらいたいです。

珠洲市 保護者の方より

家は全壊しましたが、直して住みます。高校は地元を離れて進学しました。友だちも転校したりと、かなり減っています。過疎化が急速です。当時はお年寄り、帰省客で避難所がいっぱいで入れませんでした。みんなが入れる避難所が欲しいと思いました。

二次避難中 高校生のお子さんより

笑顔の元旦が急に悪夢のようになり、困ったや辛いを乗り越えて何から動き出せばいいのか分からなくなった



能登町 保護者の方より

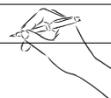
色々な県の人が支援してくれたこと。県外ナンバーの緊急車両や自衛隊車両を実際に見て、私たちはひとりじゃない、助けられていると鳥肌が立つくらい感動し、感謝の気持ちでいっぱいになりました。避難所に県外から支援に来てくれた人たちの多くは「自分も被災してたくさん支援してもらったから、次は自分が支援する番だ」と言っていて、私もそんなときが来たらできる限りお返しできたら良いな、と思いました。

七尾市 保護者の方より



経験したことのない震災に、瞬時にいろんな判断が求められました。子どもの学校の転校、住居の移転、息子の大学受験、あらゆる環境が激変し、心と体がついていくのが精一杯でした。今思い出しても、どのように対応したか思い出せないくらい気が立って、とにかく生きることしか考えられませんでした。辛い、二次避難先で仕事も見つかり、親族もいたので、住まいの面でも助けられました。ただ、それまではいきなり仕事を失って、収入もいきなり途絶え、さらにひとり親で大学生になる息子と、高校生の娘をどうやって育てようか、とても悩みました。

二次避難をされた保護者の方より



ほぼほぼ例年と同じく、通常どおりの祭りができました。たくさんの支援をいただき助かりました。ありがとうございました。

能登町 高校生のお子さんより



避難所にボランティアの方が来てくださり、炊き出して食べた豚汁が美味しかった。企業さんが提供してくれたキャラメルジュースも美味しくて、嬉しかった。自宅は半壊で公費解体予定なので、支援金や義援金为本当に助かりました。

七尾市 中学生のお子さんより



9月4日～6日、あすのば役職員が給付金の対象である奥能登6市町に訪問し、現地調査を実施しました。役所の職員からさまざまな現状をうかがいました。



工場閉鎖求人なし 仕事が見つからず

- 工場閉鎖で求人がない。ひとり親世帯の現況では休職中となっている人もいる。
- 震災による失業が発生。休業手当だけでは生活が回らないので、アルバイトをしたり、転職も検討するが仕事が見つからない状況。
- ひとり親世帯は、情報収集の時間も取れず、支援情報を手に入れられていない。
- 支援世帯では、住居が住めなくなった世帯は、転出してしまった。
- 旅館は復旧業者が中心で観光客はほとんどない。幹線道路の復旧の目途もない。
- スーパーが18時、コンビニが19時に閉店。断水がとても長引き転居が増えた。

困窮するこどもに3万円を支給「能登こども応援給付金」

震災当時、奥能登6市町(穴水町・志賀町・珠洲市・七尾市・能登町・輪島市)在住で、①児童扶養手当などを受給するひとり親世帯、②住民税非課税世帯、③生活保護世帯などの0歳から高校生世代のこどもに3万円を支給しています(10月31日申込締切)。

給付金募金 目標額の17%

給付金募金キャンペーンとして、7月6日・7日に震災被災地の仙台、神戸、熊本と東京、名古屋での街頭募金や8月初旬からクラウド・ファンディングを実施するなど広く支援を呼びかけ、373人から578万1057円のご寄付をいただいています。心からお礼申し上げます。しかし、申込者622人への必要額2053万円から1475万円の不足、見込まれる対象者1,050人への必要額3500万円から2922万円が不足し、とても厳しい状況です(10月3日現在)。



窮乏状態に胸が痛む

宮本みち子さん(放送大学/
千葉大学名誉教授)



コロナ禍やその後の物価上昇なども相まって、貧困から抜けられないこどもの数は容易には減っていきません。そのような中、能登半島の震災に遭遇したこどもたちと親ごさんは、どれほどの窮乏状態に陥っているかを想像すると胸が痛くなります。被災したこどもたちが厳しさに負けることなく、日々を送ってほしいです。そのためにも、みなさまのご支援をお願いします。

ご寄付・応援メッセージ受付中

引き続き、能登のこどもたちへのご寄付と応援メッセージを受付中です。ご寄付などは、あすのばウェブサイト↓でお受けしています。温かいご支援をお待ちしています。



公益財団法人 あすのば

〒107-0052

東京都港区赤坂 2-18-1

赤坂ヒルサイドビル 5F

TEL03-6277-8199

FAX03-6277-8519

E-mail:kifu@usnova.org

WEB:www.usnova.org